

Galanin plays an important role in cancer invasiveness and is associated with poor prognosis in stage II colorectal cancer

永吉, 絹子

<https://hdl.handle.net/2324/1500563>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

(別紙様式2)

氏名	永吉 絹子			
論文名	Galanin plays an important role in cancer invasiveness and is associated with poor prognosis in stage II colorectal cancer			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	前原 喜彦
	副査	九州大学	教授	岩城 徹
	副査	九州大学	教授	谷 憲三朗

論文審査の結果の要旨

リンパ節転移のない stage II 進行大腸癌の患者において、術後補助化学療法の選択基準となる信頼性の高い再発予測因子が必要である。ガラニンとは種々の悪性腫瘍でその発現が認められており、細胞増殖や腫瘍進展との関連が示唆されている。しかしながら、大腸癌においてはガラニン発現と患者予後との関係は明示されていない。

本研究では、stage II 大腸癌と、リンパ節転移を伴った stage III 大腸癌の切除標本のうち、術後再発を来した 56 例と対照として、非再発 56 例においてガラニンの発現を調べ、ガラニン発現と臨床病理学的因子との関連性を検討した。

患者予後については、大腸癌を用いた公共アレイデータによりデータ検証を行い、さらに、大腸癌細胞におけるガラニン発現が細胞増殖や浸潤能に与える影響を調べた。

結果として、検討した大腸癌患者において、ガラニン高発現は再発と有意に相関していた ($P < 0.001$)。ガラニン高発現の stage II 大腸癌患者は、低発現の患者に比べ、有意に予後不良であった (5 年生存率, ハザード比【HR】 = 7.31, 95%信頼区間【CI】 = 2.38-24.04, $P < 0.001$; 5 年無再発生存率, HR = 3.99, 95%CI = 1.61-9.44, $P = 0.004$)。

一方、stage III 大腸癌患者ではガラニン発現による予後の差は認められなかった。また、大腸癌細胞を用いた機能解析では、ガラニンの発現を抑制することによって癌細胞の増殖、浸潤能が有意に低下した。

以上のことから、ガラニン高発現は stage II 大腸癌患者の予後不良と関連し、ガラニン発現が大腸癌の高悪性度に関与していることが示唆されたと言える。

以上の成績は、この方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容、及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。